

二〇二六年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(三回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は から 、3 ページから 21 ページまであります。
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一 次の文章を読んで、後の一から八までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

教育、学習というと、多くの人の頭の中には連想的に学校でのそれが思い浮かぶ。ここにはとてもたくさんの構成要素からなる素朴理論*1そぼくりろんがあるように思う。その中で「①問題と正解」について考えてみたい。多くの人は、

- ・ 問題は出される (既すでにある)
- ・ 正解がある
- ・ 正解を知っている人がいる (先生)

というようなものをAテンケイ的な教育・学習場面だと考えるのではないだろうか。確かにそれらは学校では半ば当たり前のことになっている。先生が正解を知っている問題を出して生徒に問う、そこでの反応を見て生徒を評価するというのは学校の日常的な光景である。

ここで認知科学的*2に問題というものを考えてみる。問題というのは、望ましい状態と現状いっちが一致していることを指す。そして問題を解決するというのは、望ましい状態と現状が一致した状態のことを指す。どうやって一致させるかということ、現状に何らかの操作を加えることでそれを行う。問題は単一の操作で解決できることは稀まれなので、複数の操作をうまく順序立てて行わなければならない。つまり解決過程の各時点で、いろいろな操作の中から適切なものを選び出さなければならない。これをうまくやれば解決である。

学校で出される問題のほとんどは、望ましい状態は「……を求めよ」のような形で明確に示される。また現状は問題文の中に記

述してある。そして問題解決のために使う操作は、先生が授業の中で事前に教えている。数学などはこれにピッタリと合致する。

②学校ではそれでいいのだが、現実はどうなのだろうか。こういう話を講義でするときにも話すエピソードがある。それはロッテの「クーリッツシュ」という氷菓の開発のことだ。少し古いのだがお付き合いいただきたい。アイスクリームの市場は94年をピークに毎年落ち込んで来ていたという。そこで③ロッテの商品開発部の担当者は、若者数百名にインタビューをした。すると若者たちはアイスではなく、ペットボトル飲料によって夏の暑さや渴きを癒しているということが明らかになった。そこでこの担当者は、「アイスも持ち運びやすく、飲めるようにすれば良い」と考え、パウチ容器にシェーク状のアイスを入れようと考えたそうだが、ただそこから、コストの問題、アイスの温度の問題などが出てきた。これらの問題をクリアして発売に至ったのだが、初年度の売り上げは予想以上であり、当初の目標の2倍以上に引き上げられたという（この部分は2003年11月29日の朝日新聞の記事に基づいている）。

さてここでの問題とは何だろうか。よくいるのだが、アイスの売り上げが減少していることと答えた人は間違いである。ある困った事態が発生したときに、それを問題と考える人がいるが、それは違う。それは現状である。望ましい状態は売り上げを増やすこと（減らさないこと）である。ただ、売り上げを上げたいと念じていても売り上げは上がらない。だからこのレベルで問題を捉えても解決はできない。そこで問題をより具体的に、操作が可能な問題の形に変形しなければならない。そこでこの開発者はインタビューを通して、「持ち運びやすく、飲める」アイスを開発するというゴールを作り出す。これによって問題自体を創発させているのだ。この問題の解決のためのオペレータは、パウチ容器を用いるとか、シェーク状にするなどである。もちろんそこからさらにいくつかの問題が出てくるのだが、この開発者の素晴らしいところは、問題を作り出して、創発させているという点にある。問題は初めは存在していないのだ。単に困ったなあというのは問題ではない。自分が用いることのできる操作がうまく適用できるように、自分で作り出さなければならないのだ。また言うまでもないことだが、彼が問題を解決しようとした時には、正解を知っている教師はいない。そもそも正解なんか、誰一人わからないことが多いのだ。

つまり学校で通用する、「問題がある」、「正解がある」、「教師がいる」という前提は成り立たない場面が多い。問題は自分で創発させなければならぬ、正解はあるかどうか分からない、答えを知っている人も（少なくとも周りには）いない、そうした学校とはまったく異なる場面が私たちの日常を形成している。

これと関連したもう一つの素朴概念は「基礎から応用」というものだ。基礎的なことを学習した後に、それを応用するものが用意される。ここでは単純から複雑という素朴概念も関係しているだろう。最初に単純なことを学習し、それを組み合わせるより複雑な問題にチャレンジすることがふつうだと思ふ。先程の言い方をすれば、基礎的なこと、単純なことは、応用や複雑な問題を解くときの操作として機能する、ということになるだろう。

ただこれもあまり現実世界にはない話だ。それはどんな問題に直面するかが不確定だからだ。どんな問題が出てくるのか、どこらへんの問題が出てくるのか、そうしたことがわかれば、事前に操作を学習しておくことはできるだろう。しかし、現実世界ではそうしたことはわからない。だからその場で必要な操作を学ばなければならないことはとても多い。

大学では教養課程（最近はそのような言葉を使わないが）で、3、4年でやることの基礎になることを教えるという建前になっている。しかし当然だが教養で学んだことだけでやれることなどほとんどない。そうした場合、何を学べば問題を解くのに有効か、どんな書籍や論文にあたれば有効かを自分でその場で考えなければならぬ。これは大学で研究をしているような私たち教員にも当てはまる。④これまで学んだことですぐにわかってしまうような問題はそもそもつまらない問題が多い。だから、未知のBリョウイキにチャレンジし続けなくてはならないのだが、未知の問題なのでその基礎というのを事前に知ることはできない。

学校で通用する「基礎から応用」という前提は成り立たない場面があるのだ。⑤自分で創発させた問題の解決を目指し、自分の認知的リソース、環境のリソースを揺らぎながら探索していくしかない。

学校のテストというのは全員が沈黙の中で一人で問題を読み、一人で答える。相談したり、参考書を開いたりすることは許されない。そうした状況で良い成績を取る人が頭のいい人とされる。頭の中に蓄積したこと（つまり第2章で述べた認知的リソース）だけを元にして評価が行われる。これに違反するとカンニングと呼ばれ、処罰の対象となる。

しかし、これまでの章で何度も述べてきたように、人の知性は環境を前提として組み立てられている。環境に働きかけ、そこから情報を得て、そこからまた考えて再度環境に働きかけるといふサイクルの中で知性は発現するのだ。ここでの環境はいわゆる物理的な環境だけでなく、周りの人々も含んだものである。必要な資料を検索する、同僚、先輩に意見を求める、そうした中で私たちは認知を営んでいるのだ。

だから情報をうまく引き出す方法を知っていることは、頭の中にある認知的リソースを適切に働かせることにつながる。関連する書籍を見つけ出す、その目次を利用する、索引から調べる、検索ソフトの使い方を知っている、そこでの絞り込み方を身につけている、そうしたことは頭がうまく働くためには必須だ。また自分の置かれた状況をわかりやすく相手に伝える、うまいアドバイスを得るための質問ができる、こうしたことも社会の中で知的に行動するためには必須のことだ。さらに言えば、うまく知性を働かせる環境を用意する、いい仲間づくりをすることもとてもだいじなのだ。

(中略)

学校教育で行われているテストは、知性の重要なパートナーである環境を剥奪することが前提となっている。こうした評価は一面的ではないだろうか。環境のサポートがない状態でうまく働く知性が、サポートのある場面では必要ないこともあるだろうし、サポートなし環境に備えた努力（特にテストのための一夜漬けの勉強）はさしたる意味がないことも多いと思う。

(『私たちはどう学んでいるのか 創発から見る認知の変化』 鈴木 宏昭)

(注)

- *1 素朴理論——学習や教育ではなく、日常生活や活動のなかで自然に習得する理論や概念のこと。
- *2 認知科学——人間やその他動物の知能や知的プロセスを科学的に解明する学問分野。
- *3 氷菓——水や牛乳などの液体食品に、小豆、でんぷん、果汁、果実、砂糖、蜜などを加えて凍らせたもの。
- *4 パウチ容器——化粧品や洗剤のつめかえ容器などに用いられる、柔軟性のある材料を使用した包装。
- *5 オペレータ——操作。
- *6 教養課程——大学において、特定の分野に限らず、幅広く知識や見識を広げることで学問の基礎を得る段階。
- *7 リソース——目的達成や事業展開などのために必要な資源や資産。

問一 —線A「テンケイ」・B「リョウイキ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいいいにはつきりと書くこと。)

問二 —線①「問題と正解」とありますが、筆者は学校において「問題」の「正解」はどのように導かれるものだと考えていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア それぞれの問題について把握し、先生が求めている正解を改めて自分で手順を考えて一から作り出す。
- イ 先生が正解と考えているものをこれまでの学習内容から推測し、少しでもそれと近い答えを組み立てていく。
- ウ すでにある問題に対して事前に教えられた操作を適切に選び、適切な手順で組み立てることで解決する。
- エ 問題解決に必要な操作や手段を作り出し、順序立てて実行することで、今ある現状を変化させる。
- オ 他者や情報を活用し、自分で問題解決のプロセスを作ること、望ましい形で問題を解決する。

問三 ―線②「学校ではどうなのだろうか」から始まる部分は、本文においてどのような役割を持っていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これまでの論を軸に据えて、学校と現実世界を総合的に分析していくことを示す役割。

イ これから論を展開するにあたり、学校よりも現実世界の方が重要であることを示す役割。

ウ これまでの論を踏まえて、現実世界の「問題と正解」の論に読者を誘う役割。

エ これから挙げる具体例を読者が実感を持って理解するための視点を持たせる役割。

オ これまでの論に区切りをつけて、これから主題の異なる論を展開することを示す役割。

問四 ―線③「ロッテの商品開発部の担当者」が「クーリッシュ」の開発において作り出した問題とは何ですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア アイスの売り上げを増やさなければいけないという問題。

イ 若者達は夏にアイスよりも飲料を求めているという問題。

ウ アイスの市場が年々縮小傾向にあるという問題。

エ 持ち運びやすく飲めるアイスをいかに作るかという問題。

オ アイスでは夏の暑さや喉の渇きを癒しきれないという問題。

問五 ―線④「これまで多く」とありますが、筆者はなぜ「つまらない」と考えるのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 事前に必要な知識や手順が明白な問題は、その答えも取り組む時点で明確に存在するから。

イ 面白い問題とは未知のことに対して自分で挑戦することでしか解決できないものであるから。

ウ 既知の問題でも自分で必要な知識や手順を考えることに大きな意味や目的があるから。

エ 問題解決に求められる知識が簡明だと、問題解決の複雑さや困難さが保たれないから。
オ 答えが既に存在する問題に取り組む場合、時間をひたすら無駄に費やすことになるから。

問六 ―線⑤「自分で探索していくしかない」とありますが、ここでのいう「探索」とはどのような行為のことを指しますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 創発した問題に対して明確な手順を踏みながら、最適な解決方法を編み出していくこと。

イ 創発した問題を解決するために必要なものを自分で考えながら、試行錯誤を繰り返すこと。

ウ 創発した問題が持つ課題を組み合わせながら、よりよい方法を現実的な形で創ること。

エ 創発した問題に対応する答えがなかったとしても、様々な経験を積み重ねていくこと。

オ 創発した問題を自分で思考しながら、現実世界でも「基礎から応用」の前提を成立させること。

問七 本文の内容に合致するものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学校では問題を解くために書籍や論文にあたりながら考えることが重視されているが、筆者はそれに疑問を呈している。

イ 問題を創発し解決に辿り着くためには、現状把握のための情報収集や調査を丁寧に行うことが求められる。

ウ 問題は単一の操作では解決できないのは間違いなく、複数の操作をうまく組み立て、解決する必要がある。

エ 学校でも現実世界でも、未知の問題に取り組むためには基礎を十分に養っておくことが大事である。

オ どんな問題に直面するかは、現実世界ではあらかじめ決まっているわけではなく、予測がつかないものである。

問八 筆者は現実世界の「知性」をどのようなものとして考えていますか。「問題と正解」に関する議論を踏まえて六十字以内で答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の一から十までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

この場面での語り手である小学五年生の川口大地は、同級生の宇津井理子（通称イリコ）・貝谷の協力を得ながら、コロナ禍以降通学しておらず連絡の取れなくなった友人シユンの現状を探っている。そんな中で、小学六年生の転校生橋本と二人の間が、シユンが住むマンションなど近隣にゴミを捨てるいたずらをしているうえに、万引きにまで手を出そうとしていることに気づく。川口たちは、昼食時の放送で彼らのゴミを捨てるいたずらを暗に告発した「都市伝説」の物語を朗読してもらい、焦って帰り道で話し合う橋本たち三人を尾行して盗み聞きしていた。

橋本に責任をなすりつけた仲間の一人が、悪そうに振る舞っている橋本が転校前はいじめられていたのだと指摘し、その場を去る。残った一人が橋本に*いじめられていた理由をたずねる*。本文は川口たちがその続きの場面を見守るところから始まる。

「ゴミ。ゴミ収集の仕事」

「え、なんの話？」

「親が、ゴミ収集車に乗って、ゴミを集める仕事してる」

「あ、そうなんだ」

それが理由でいじめられたってことだろうか。でもゴミ収集車って「はたらくくるま」として低学年には人気だし、高学年的には清掃工場見学とかでわりと身近な存在な気がする。区のイベントとかでも体験用の車両と職員さんがよく来てるし、それをいじめの理由にするのは、① なんかちょっと納得がいかない。(もちろん、自分がゴミを触りたいかって言ったら違うんだけど——)でも、だからこそそのゴミを運んでくれる人にはありがたうと思うわけで。そしてそれは、② 振り返った生徒も同じだった。

「だったら、安心していいよ。この学校で、そういうこと気にするやついないと思う」

だよ。それにさ、保護者の仕事が何かなんて子供には関係ないじゃん。そういうの気にする人もいるのは知ってるけど、僕はそうじゃないし、そうじゃない人も多いと思う。

でも、転校生はその言葉を聞いても「あ」。

「……違うんだ」

「違うって、なにが？」

「ゴミ収集だからって、いじめられたわけじゃない。それだったら、もっと小さい頃からそうなってもおかしくないだろ」

「あ——うん」

まあ、それは確かに。でも、じゃあなんで六年生になって急に？

「コロナだよ」

「え？ 家族がかかったとか？」

ほんの少し、③相手が体を引いた。学校は始まっているとはいえ、まだ感染して亡くなる人がいるし、治療法もよくわかっていないみたいだから怖いのはわかる。

「かかったりはしてない。けど、かかった人の出したゴミを父親は触ってたかもしれない」

「ええ……」

今度こそ、はっきりと一歩下がった。④それを見ても、転校生は表情を変えずに続ける。

「もちろん仕事中は手袋にマスクもしてる。でも、自宅療養の人のゴミかそうでない人のゴミかなんて、いちいちわかるわけないだろ。それに、感染者のゴミだからって断るわけにもいかないし」

「それは——そうだね」

「そしたら、ゴミの収集作業員を感染源みたいに言うやつが出たんだ」

「感染源？」

「コロナのゴミを触ってるんだから、感染してるに決まってる。無症状感染のまま働いて、ウイルスをばら撒いてる、って」
「まじかよ」

「大人が言ったんだぜ？ 信じられないよな。そしたら当たり前だけど、子供に伝わる。それで俺も、学校にウイルスをばら撒くなって言われたんだ」

ひどい。ひどすぎる。僕は思わず、「い」。

そういえば、前に京ちゃんも言った。医療従事者もコロナ感染者と接触するから、そういう差別をされることがあるって。そのせいで子供を保育園に預けるのを断られたり、家族に接触しないようホテル暮らしをしなければいけなかったりということもあつたらしい。

(⑤ 恩知らず、ってこういうときの言葉だよね——?)

誰かが捨ててくれなければ、コロナ感染者のゴミは道に置かれたままになって、ウイルスが飛び散るだろう。誰かが診てくれなければ、コロナにかかった人は自宅で苦しむしかない。うまくホテル療養ができて、看護師さんがいなければやっぱり同じことになる。さらに薬を出してくれる薬剤師さんや、病院の清掃をしてくれる人。関わっている人は、僕が考えつくよりもっとたくさんいるだろう。なのに。

(自分はその人たちの力を借りてるのに、ひどいことを言うなんて!)

話を聞かされた生徒も「ひどいな」と言った。

「あ、だからゴミを落とすのにこだわってたのか」

転校生はこくりとうなずく。

「誰だれのおかげできれいになってるのか、思い知らせてやりたかったんだ」

転校生のやったことはよくない。でも、⑥理由を知ってしまったら責めることができないような気がした。だって、言いばかりにもほどがあるから。

(あり得ない！)

あり得ないし、許せない。体の中で、どうしようもない気持ちがあぐうっと膨ふくれ上がる。でも隠かくれてるから、何も言えなくてすごくやしい。

と、思っていたら。

イリコが、いきなり立ち上がった。

「ひどすぎる!!」

ツツジの植うえ込みから上半身が出た状態で、イリコが叫さけぶ。

「え、ちよま」

貝谷かいが慌あわてて止めようとしても、もう遅おそかった。転校生たちが振り向むいている。イリコは植うえ込みの脇わきから出ると、その二人に向むかってずんずん近づいていく。

「え、誰だれ」

「なに？」

驚おどろいたまま固こまっている二人のそばまで行くと、イリコは転校生を指差した。

「あなた!」

「え——俺おれ?」

転校生が混乱した様子で自分を指差す。

「そう、あなただよ。名前は？」

「あ、橋本」

答えちゃった。イリコ以外の全員が、同じことを思った気がする。

「橋本さん。それってさ、ひどすぎるよ。あなたがやったことは良くないことだけど、されたことはもっと良くない！ それを聞いたら、なんか黙ってられない！」

黙ってられない。それは優等生で正義の味方のイリコの、正直な気持ちだろう。

「だって、そんな理由あり得ないよ！ ていうかおかしいよね？」

ね？ と言いながらイリコがくるりとこつちを振り返る。

「うわこつち見んなし」

貝谷がどんよりとした表情を浮かべた。と同時に、転校生の橋本とその仲間がこつちに目を向ける。

しょうがないので、二人して立ち上がる。

「何人いるんだよ」

仲間の方に言われて、だよね、という気分になった。こつちだって、出る予定じゃなかったし。

微妙な沈黙。私道の脇を、子供を乗せた自転車が通り過ぎる。ごく当たり前の、いつもの通学路。そんな中、勢いで立ち上がったイリコと、困惑している六年生。でもって⑦「ええー」な貝谷と僕。これ、何をどうしたらいいんだろう。

そのまま黙っていたら、仲間の方が我に返ったように顔を歪めた。

「つかなんなの、お前ら。うちの学校？」

あ、これはよくない流れが来てしまうかも。そう思ったとき、貝谷が「あの一」と片手を挙げた。

「ハシモトさん？　が前の学校でやられたことって最低だと思うし、文句言っているかと思う。ひどいよね。で、その仕返して色々やっちゃったってのも、わからなくない」

いきなり同意からはじめられて、六年生の二人はきよんとした表情を浮かべる。

「なにお前」

そう突っ込まれて、貝谷は「俺は」と言いかけて首をかしげた。そしていきなり僕の方を見る。

「あのさ、俺ってなんだっけ」

「ええっ？」

「だって相田とは直接友達じゃないし、宇津井ともそうだろ。川口センサーとは友達？　って思ってるけど違う？」

いやだから全員の名前言っちゃってるし。僕は心の中で頭を抱える。

「違うけど」

「あ、よかったー」

そんな僕たちに向かって、仲間の方が言った。

「だからなんなんだよお前ら！」

一瞬、ごまかしてしまおうかと思った。偶然通りかかって聞いていて、ひどいと思ったから、みたいな。でも、それでこの場をやり過ごすのは違う気がした。だってなんだかこう、⑧色々言いたいことがあるすぎる。

「僕たちは、ずっと橋本さんたちのことを調べてた」

「えっ？」

あまりにも意外だったのか、六年生二人は妙に素直な顔で驚く。なので、とにかく説明してみることにした。

「なんでかって言うと、あなたたちのやったことに僕たちの友達が巻き込まれたかもしれないから」

僕の言葉に、橋本が首をかしげた。

「——誰のことだよ？」

「あなたがゴミを落としたマンションの一つに、住んでるんだ。それで今、学校に来てない」
そう言うと、橋本はちょっと都合の悪そうな顔をする。

「でもそいつ、俺たちと関係あるのかよ」

「わからない。でも、その子が来なくなったのと、ゴミが落ちてた時期が近いんだ。それで、理由の一つかもしれないと思った」
「——ゴミが落ちてただけで、学校に来なくなる？」

仲間の方が言うと、イリコが「わかんないけど」と続けた。

「わかんないけど、自分へのいじめだって考えちゃったら、怖くて家から出たくなるかも」

「だよな。家の前まで来たぞっていういじめっ子のメッセージみたいだもんな」

それを聞いて、二人は顔を見合わせる。

「そんなこと——考えてもみなかった」

「いや、ていうか不登校のやつがいるかどうかなんて知らないし。わざとやったわけじゃないし」

その言葉を聞いて、イリコが再び爆発した。

「そうだよ！ 誰がいるかなんてわかんないんだよ！」

「え？」

「うちらにとってはシュンだけど、もしかしたら他のマンションには同じように不登校の、もっと低学年の子だったかもしれない。それが、中学生や高校生の不登校の人もいたかもしれない」

「そんなこと言われても……」

「外に出るのが怖い人だけじゃないよ。足の悪い人とか、お年寄りとか、そういう人がドアから出てすぐのところにあるゴミを踏んで転んだりとかもあるかもしれない。そういうこと、考えないとダメじゃん！」

えええ。六年生二人は、イリコに完全に言い負かされた。

(——どうなっちゃうんだろう?)

逆ギレして、殴りかかってきたりしたらどうしよう。でもこっちは三人だし、とりあえずイリコをかばわないと。なんてことを考えていたら、橋本がぼそりと「ごめん」と言った。

「え？」

言った側のイリコが、意外そうな声を上げる。

「だから、ごめん。お前らの友達のこととか、そういう人のこと、考えずにやってた」

それを聞いた仲間も「俺も」と言い出した。

「俺も、ゴミ落とすこと軽く思ってた。誰かが片づけるだけだろって。ごめん」

なんだ。話したら案外悪い奴じゃないっばい。貝谷もそう思ったのか、「だったらさあ」と声をかける。

「今から全員で、学校に戻るのはどうかなあ」

(『きみのかたち』 坂木 司)

(注)

* 相田——シュンのこと。

問一 ー線①「なんかちよっと納得がいかない」とありますが、なぜですか。その理由としてあてはまらないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 転校生の親が乗るゴミ収集車は、「はたらくくるま」としてことも達から親しまれているため、いじめの原因になりにくそうだから。

イ 親の職業によって子ども同士の関係が決まったりいじめられたりするのはおかしいし、そもそも親の職業を気にしない方が大多数だと思うから。

ウ ゴミ収集という自分ならやりたくない仕事に従事する、転校生の親のような存在のお陰で社会は回っているのに、いじめるなんて罰当たりだから。

エ 病気の感染リスクの高い職業だからといって、そのことも病気を媒介しているなどと責めていじめるというのはあまりに見当違いだから。

オ 転校生の親は、区のイベントや工場見学を通して親近感を感じやすい清掃の仕事に就いているので、いじめの理由として腑に落ちないから。

問二 ー線②「振り返った生徒」とは誰のことですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 川口 イ イリコ ウ 貝谷 エ 橋本 オ 橋本の仲間

問三 空らん「あ」「い」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはないものとする。

ア 眉をひそめただけだった イ こぶしをぎゅうつと握りしめた

ウ がっくりと肩を落とした エ まだ下を向いたままだ

オ へなへなと腰をぬかした

問四 ―線③「相手が体を引いた」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いじめの理由がコロナだと聞いて驚いたから。

イ 家族がコロナにかかったと思って心配したから。

ウ コロナをうつされる危険を感じて警戒したから。

エ ゴミ収集は感染の恐れがある仕事だと認識したから。

オ 予想外の返答に相手の話により興味を持ったから。

問五 ―線④「それを見ても、転校生は表情を変えずに続ける」とありますが、ここでの「転校生」の様子として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 感染者のゴミを収集しなければ、余計に感染は拡大するため、立派な仕事だと捉えているから意に介していない。

イ 社会を支えている父の職業に誇りを感じていて、他者の評価でゆらぐことはないから反論せずに聞き流している。

ウ 感染者のゴミかどうかを区別なんてできないことに気づかないのは愚かだと思っているから相手にしていない。

エ 手袋着用など感染対策を行っていると世間から認識されていないことは理解しているからそれほど気にしていない。

オ コロナウイルスを媒介しているかのような反応は、何度も経験して慣れていたものだから特に反応していない。

問六 ―線⑤「恩知らず」とありますが、どのような行動について言っているのですか。本文中から二十六字で探し、最初と最後の三字をそれぞれ抜き出さない。

問七 ―線⑥「理由を知ってしまったら責めることができないような気がした」とありますが、なぜですか。転校生がゴミを落とした理由に触れつつ、八十字以内で答えなさい。

問八 ―線⑦「『ええー』な貝谷と僕」とありますが、このときの「僕」の心情として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア イリコの行動によって、隠れて聞き耳を立てていたことがばれてしまった状況に戸惑っている。

イ イリコに共感を求められ、関係のない自分まで巻き込まれてしまうことに面倒くさく思っている。

ウ イリコが自分の意見を一方的にまくし立てて同意を求めてくるので、うっとうしく思っている。

エ 思ったことを心のままに表明しているイリコとは対照的に、何も言えない自分を悔しがっている。

オ イリコの出現で驚いている六年生に対して、どのように声をかけるべきか分からなくなっている。

問九 ―線⑧「色々言いたいことがあるすぎる」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 転校生達がゴミを落としたマンションには、そのいたずらを自分へのいじめだと感じ怖がっている低学年の子がいるのではないかとということ。

イ 転校生がいじめられた腹いせにやったゴミのポイ捨ては、無関係のお年寄りや足の悪い人への迷惑になっていて、見当違いな振る舞いだということ。

ウ 転校生達がマンションにゴミを落とすようになったせいで友人が不登校になってしまったため、もう嫌がらせをやめてほしいということ。

エ 転校生は清掃業務の意義を知らしめたいとマンションにゴミを落としていたが、結果的にゴミ収集の仕事を増やしただけで本末転倒だということ。

オ 転校生達がゴミを落とすいたずらを始めたから、友人が学校に来られなくなってしまったのかもしれない、その責任を問いたいということ。

問十 次の会話は本文の登場人物について語ったものですが、本文の内容を踏まえた上での発言として適当でないことを述べている人を会話の後のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

Aさん..口数の少ない川口は一步引いて状況を見ているけど、正義感があって情に厚いところもあるよね。

Bさん..友達のために行動しているからね。正義感と言えば、優等生のイリコが思い浮かぶな。

Cさん..イリコは六年生相手でも、物怖じしないで終始冷静に批判していて、そのうえ相手に非を認めさせるからすごいよ。

Dさん..イリコもすごいけど、あの気まずい状況で、いきなり相手への共感から始めて懐に入る貝谷の方がすごいと思わない？

Eさん..あれは高度なコミュニケーション能力だね。天性のものなのかな。六年生も思わず氣勢を削がれていたね。

Bさん..先輩にツツコミを入れられているのに、突然川口に自分たちが友達かどうか確認してくる貝谷はマイペースでなんだか憎めないな。

Aさん..橋本も困っただろうね。それからシユンの話をされて訳が分からなかっただろうな。でも、いちやもんだってほねのけないで謝った橋本は根がいい人なんだろうね。

Cさん..イリコに説教されても、黙って静かに聞いていたしね。ちなみにこのとき、川口は反撃されたらイリコを守ろうとしていたんだよね。読んでいてときめいたよ。

Eさん..橋本の仲間も、なんだかんだ反省していたね。冒頭で橋本がいじめの原因を打ち明けたときも、コロナは怖いという気持ちにはありつつも、橋本に寄り添っているように見えた。

Dさん..どの登場人物もそれぞれの個性が光っていて、しかもみんないい子たちだね。きっとこの後、学校に戻って先生に経緯を打ち明けに行くんだろうな。

〈選択肢〉 ア Aさん イ Bさん ウ Cさん エ Dさん オ Eさん

